

物語の導き手

—— 翻訳ファンタジーにおけるネコの役割

川端 有子

ネコを愛する人ならみんな知っていると思う。この動物

がどれほど気ままに境界領域を行き来するか。時にはひなたで飼い主の膝に寄りそって愛撫をせがむかと思えば、野のけもののように小鳥を狙い昆虫をつかまえてもてあそぶ。目を細めて喉を鳴らしたと思えば、驚くほど冷めた眼差しで戸外を凝視する。飼いならされたペットでありながら、決して人には従属せず、甘えながらも野生の本能を保ち続ける。

だからこそ、ファンタジーにおけるネコの役割は、二つの世界を橋渡しすることにあるのだろう。この小論では、翻訳ファンタジーを『不思議の国のアリス』から始め、もちろん、ファンタジーにはネコが主人公になるものも多く存在するのだが、いるのかいないのか、わからないようでありながら、欠かせないというさりげない配役のストーリーを選んでみた。そこにこそ、ネコの本質が表れているよ

うな気がするからである。

ルイス・キャロルは一八六五年に『不思議の国のアリス』、一八七一年に『鏡の国のアリス』の、ふたつのアリスの物語を出版した。あいだに六年の月日がすぎているが、作品上は半年が経過したことになっている。不思議の国は、夏の川辺での戸外の物語、鏡の国は、初冬の室内の暖炉のマントルピースの鏡から始まる物語で、鏡の国でアリスは、ハンプティ・ダンプティに年齢を聞かれて、七歳と半分だと答えているからだ。

この二つの物語は、モデルともなり最初の聞き手となった（ただし、鏡の国のほうは、アリス・リデルはもう實際の聞き手ではなかった）アリス・リデルのペットのネコが、発端から大きな役割を果たしていることがわかる。

ウサギのあとを追いかけて、後先も考えずに穴の中にとびこんだアリスは、どこにつづくともわからぬ縦穴を落ちながら、家においてきたネコのダイナのことが気になって